

■一般市民との接点に立つ

出合いを重ねて、対話でつくる信頼

WIN-Global / WIN-Japan 小川順子

放射線は WIN の究極のテーマ

原子力の仕事をする女性たちのグループ WIN (Women In Nuclear-ウイメン・イン・ニュークリア:ウイン) は、世界 60 カ国に約 2,000 名の会員を持つ団体で、日本組織を WIN-Japan (ウイン-ジャパン、会員数約 200 名、以下 WINJ) という。原子力や放射線にかかわる仕事を持つ女性なら誰でも会員資格があり(男性は賛助会員)、女性や次世代層への原子力理解促進、国際交流、会員自身の資質向上を目的としている。それぞれが忙しい日常業務をこなしながらの WIN 活動なので、無理のない範囲での取り組みになるが、日常業務で培ったことが WIN 活動にも生きるし、逆に WIN で得た人脈や体験が業務にフィードバックできることも多く、相乗効果を上げている。

放射線に関するテーマは、WINJ にとって究極のテーマといえる。WINJ は 2001 年以來、主婦層を中心とする女性たちとのハート to ハートの交流会を重ねてきた。その中で話し合われたことは、「情報公開」、「防災体制」、「安全管理」、「風評被害」、「地域振興」、「環境とエネルギー」、「教育問題」など数え上げればきりがなが、結局放射線をいかに理解していただくか、という一点に集約されるといっても過言ではない。

本稿では、本年 6 月に開催された

WINJ の 2 つの女性交流会を紹介したい。ひとつは、佐賀県唐津市での女性交流会。唐津市およびその周辺では、女性を対象にした原子力関連の集まりは今までほとんどなく、昨年秋に WINJ が行った交流会が初めてとのことであった。今回は 2 回目の会合なので、放射線に関するいろいろな話題を中心に企画した。もうひとつは、WINJ と最も長いお付き合いがある、東海村とその周辺にお住まいの女性たちと交流会である。WINJ 唯一の地域組織「WINJ いばらき」が主催運営した。この地の交流会は毎年非常に活発で、今回で 6 回を数える。テーマは、「いま、あらためてふりかえる JCO 事故」である。「原子力の村」として 50 年近くの歳月を原子力とともに暮らしてきた女性たちの生の言葉は、迫りに満ちていた。

「えっ！こんなところからも放射線!?」—フォローアップ女性交流会 in 唐津

唐津では、昨年 1 回交流会に続くフォローアップ女性交流会を行った。プログラムは、第一部と第二部に分かれ、第一部では、放射線についてのトークショーを行った。WINJ 理事の千歳敬子さん(三菱重工業)が講師で、聞き役が会員の中尾朱実さん(九州電力)。千歳さんは技術者で、相手の疑問のポイントは何か、相手の立場に立って的確な答えを分かりやすく表現する達人であ

る。聞き役の中尾さんは参加者の気持ちを汲み取った質問をして、共感をかもし出した。

ところで、いくら面白い話でも、聞いているだけでは、家に帰ったら、「はて、何の話だったかしらん」となりがちである。やはり、自分で参加して感じる体験をしなければ知識として定着しにくい。そこで、いろいろな集まりで行われているのが、霧箱実験(放射線の通る軌跡が見られる)と放射線測定である。この交流会でもその 2 つを採り入れた。霧箱は全部手作りだと時間がかかるし、出来合いのものでは感動が薄い。そこで、半分手作りで、放射線軌跡もきちんと見られる方法を採用した。材料はほとんどが、主婦にはおなじみの 100 円ショップグッズ。これなら家でも再現できるかも!! お弁当箱の中にゆらゆらと、あるいはシャープに飛びかう白い線に、「放射線ってこんなに身近だったのね」と感心しきりであった。このように第一部でさまざまな体験をして、それぞれに「はてな？」をため込んでもらい、第二部のテーブルトークでは、たまった疑問を WINJ 会員にどしどし聞いていただく。こうしてそれぞれの参加意識を高め、会員との絆を強くしていく。

「放射線」のような堅苦しいテーマでいくときには、参加者が緊張せず、だらけず、興味が持続するように、会場の雰囲気配りに気配りしながら進行

することが大事である。原子力のいろいろな分野のプロフェッショナルである WINJ 会員の協力作業で行う女性交流会は、手作りながら毎回実りの多い活動を展開している。

いま、あらためて、JCO 事故を振り返る

「WINJ いばらき」から、今年のフォローアップ女性交流会は「JCO 事故をきっかけに原子力とどうつきあっていますか？」にしたいとの提案を受け、正直、「いま？ なぜ？」という疑問が心に湧いた。しかし提案者から、「東海地域では、交流会を開くと必ず JCO が一番の話題になる。それほどこの地域の人々にとって JCO 事故とは大事件だった。一度はその気持ちとしっかりと向き合う企画をすべきと思う」との理由を聞き、すつと得心した。そう、確かに東海とその周辺の皆さまとは、何回もテーブルトークをさせていただいているが、1999 年秋に起こった JCO 事故は一人ひとりの記憶の中に、まだ生々しく根を張っている。それぞれの体験がドラマであり、自分史の一頁なのだ。そこで講師を、当時の東海村の事故対応責任者であった方をお願いし、第 6 回の交流会を開催した。

講演では、事故発生当時の、情報が錯綜し、緊迫した役所の様子が当事者の口から語られたので、参加者は自分の体験と引き比べながら、大きくうなずきながら聞き入っていた。そして、今まで誤解していたこと、なんとなく不安だったことが一つずつ解明されて、より客観的に JCO 事故と向き合うことができたのではないかと思う。

この交流会では、30 名の地域から

の参加者と、14 名の WINJ メンバーが、いくつかのテーブルに分かれて語りあった。テーブルトークの中で出てきた意見は 150 件。そのうち、国内で初めて行われた住民への放射線測定など、放射能、放射線にかかわる意見は 30 件だった。風評被害についての発言も多く、その原因はマスコミの扱いにあるのではないかと指摘した人も多かった。風評被害は、農産物、海産物が放射能に汚染されているのではないかと心配からくるものであり、結局意見の多くは何らかの形で放射線とかかわっている。一方、家族や知人などに原子力関係者がいる人や、発電所見学などをして以前説明を受けたことのある人は、「放射能や放射線について、ある程度知識があったので、不安は感じなかった」と述べている。

放射能や放射線に対する漠然とした不安はなかなか解消することはできないが、知識があれば不必要に怖がることはなくなるのではないか。その第一歩が、私たち原子力の仕事に携わる者が住民の方の話を聞き、分かりやすく説明する、ということだと思ふ。それも、一度や二度ではなかなか身についた知識としていただけなので、何回も繰り返し伝えることが望ましい。理解促進活動は、終わりのない根気仕事である。事故やトラブルが起きても、皆様から叱咤激励を受けつつ、でも信頼は崩れないという関係を作りたいと思う。

これからもハート to ハートで

最後に WIN の海外の会員との意見交換でのエピソードの一つ披露したい。米国のデュークエナジーは、

米国で初めて MOX 燃料を自社所有の原子力発電所に近々装荷することになっているが、以前、デューク社の広報部長(WIN 会員)に MOX 燃料の広報活動について聞いてみた。日本ではこの問題が住民投票にまで発展したことがあったからだ。すると、「MOX 燃料は燃料の成分が一部変わるだけで、原子炉の安全性は設計どおり維持できるのだから、特別な広報をする予定はない」とのことであった。「なにか特別なことがあるから、いつもより広報に力を入れるというのは、本当の意味でのコミュニケーションではない。事故対応時は別として、通常はいつも同じ頻度、同じ濃度で住民に発信していく。それが住民が私たちに信頼を寄せる土壌になるのです」との言葉に、彼我の差を感じつつ、その姿勢を貫けることをうらやましく思った。

今回は一般の方々と放射線の話をどのようにしているかという観点で、WIN 活動の一端を紹介した。原子力発電は、放射線管理の上に成り立っている産業である。「放射線管理」と「放射線利用」は表裏一体だと思ふ。そのことをわきまえながら、これからも WINJ の仲間と、放射線についてのさまざまな話題を多くの方に提供し続けていきたいと思う。



【おがわ・じゅんこ 会長】